

で初めから読むのを諦めていた（諦めざるを得なかった）のが、今は展覧会や資料館などに行っても、まだすんなり読める程実力はついていませんが、楽しんで読もうという気になります。これは確実に古文書の勉強のお蔭で、それだけでも単純に、勉強して良かったなと思っています。また、原典にあたっての細かい、しかし地道な積み

重ねが生きてくる仕事であるだけに、女性に、特に地域を広く把え、地図を見ることの出来る地理学を学んだ女性には（細切れの時間しかもてない主婦にも）、視野の広さを失いさえしなければ向いている勉強の一つではないかと思えるのです。

（本学非常勤講師）

距離とは ——直線距離・時間距離・心理距離——

正井泰夫

地理学にとって距離は最も重要な尺度の一つである。もっとも、地図を使わない地理的研究もあるので、その場合には、距離はあまり問題にならないかも知れない。だが、たいいていの場合、距離の分る地図が使われたり、たとえ地図が使われなくても、距離というものが、その研究や観察の中で重要な地位を占めている。

ところが、一口に距離といっても、それにはいろいろなものがあるらしい。一番分りやすいのは直線距離だろう。東京とニューヨークの間の距離はと聞かれれば、地理的素養の少しでもある人なら、その間の大圏コースの11,000キロと答えるだろう。東京と大阪はと聞かれれば、さて約500キロだったかなと考える。実際には直線で約400キロだ。しかし、新幹線だと500キロと少しである。鉄道距離や道路距離は、直線距離より長いことが多いが、それでも何倍も違うということはそれほど多くない。もちろん、チベットのよう高山に行けば、直線距離と道路距離はあまり違わないなどとはいえない。

ややこしいのは時間距離だ。時間のかかりかたによって、距離感があまりにも違ってしまふ。東京の街はものすごく広いと感じている人が多いが、これはむしろ時間距離があまりにも大きいためにそう思うためらしい。真夜中、もし時速100キロぐらいで東京の街中を走ったとすると、東京駅と新宿駅の間は10分もかからず、数分である。直線距離の6キロ弱を、中央線の電車はどういうわけか10キロ以上も延長して走っている。所要時間は快速でも15分ほどかかり、各停だ

と20分以上かかる。6キロ弱という距離は歩いて1時間半あれば十分である。速い人なら1時間もあればよい。電車を待ったりしている時間を考えると、中央線各停車と歩く人の速さは、2倍ちょっとの差に過ぎない。

心理距離は、時間距離によってその一部がつけられるが、実際には情報量の多い少いによって大きく形づくられる。未知の国は何となく遠く感じるが、よく知っている国は、心理的に身近かに思える。その結果、うっかりすると直線距離まで短かく感じてしまふ。

心理距離というものは、たいへんにややこしい。地域名のつけ方によっても変わってしまう。インドはアジアにあるので、かなりの日本人はインドはそれほど遠い国でないように思っている。だがデリーまでの距離は直線で6,000キロで、ハワイとほぼ同じだ。時間的にはもっと遠い。たいいていの飛行機はバンコク経由なので約8,000キロもある。カリフォルニアまでの距離だ。だが、アジアの国、それも西アジアではなくて南アジアの国という、あまり離れていないような気もする。

若い人にとっては、インドとカリフォルニアは、後者の方がずっと近く感じているだろう。同じ時間をかけて飛んでいっても、よく知っている土地はそう感じるからだ。行かないで、日本で考えていると、カリフォルニアはもっと近い。

チベットは4,000～5,000キロなのだが、たいいていの日本人にとっては、心理的にたいへん遠いところだ。日本の長さが3,000km以上あるのだから、それほど遠いところでもなく、また九州や沖縄か

らだと、1,000～2,000キロも近くなる。それでも、はらかな土地に思えるから不思議だ。そのチベットも、地理的情報が続々と入ってくるにしたがっ

て、急速に近くなってきている。世界は本当に狭くなった。

(立正大学)

磯笛のむらから

吉川 虎雄

この表題は、房総半島南岸、千倉町白間津の海女、田仲のよさんの著書（現代書館、1985）の題名である。磯笛とは、海女が潜水を終えて浮上した時、強く息を吐き出すために鳴る口笛のことをいう。田仲さんには『海女たちの四季』（新宿書房、1983）という前著もある。いずれも、海女の暮らしを中心とする白間津の民俗が記されている。

私はこれらの本を、昨秋千倉海岸を調査した時に、漁協の売店で見付けた。両著の間には多少重複した部分もあるが、素朴な筆致で語るように書かれた田仲さんの本には、ほのぼのとした暖かみを感じられる。編者の手がどれだけ加わっているかは知らないが、私はその生き生きした叙述にすっかり魅了された。そして、およそ民俗とは縁遠い仕事をしてきた私でさえ、これらの本によって千倉海岸に一層親しみを感ずるようになった。

私が千倉海岸を初めて調査したのは、もう30年あまりも前の昭和28～29年のことである。それ以来、実習や調査の指導などのために、1年置き位にここを訪れている。そして、5年ほど前から、もう一度調査する気になって、たびたびここに来るようになった。以前から疑問を抱いていた波蝕棚の形成水準を明確にすることと、完新世海成段丘に見られる多数の小崖は地震の際の隆起を示すものかという疑問を解くこととが、その目的であった。海岸の岩礁地帯の水準測量から始まったこの調査は、とうとう5年を要した。初めは測量助手にすぎなかった茅根 創君が、その間ずっと協力してくれ、私の東大退職後は、彼がむしろ中心になってこの研究を推進した。その成果は地理学評論59巻1号（1986年1月）に発表したもので、興味のある方はそれをご覧ください。

この調査の際に、耕地の開けた段丘面を測量していると、野良で働く土地の人々から、何をして

いるのかとたびたび問い掛けられた。それらの会話を通して、畑の中から出た貝の話とか、大正12年の大地震の前の海岸の様子とか、あるいは元禄の大地震に関する言伝えとかを、聞くことができた。そして、この海岸に住む人々が、その土地柄のせいであろうか、地震や土地の変遷に一方ならぬ関心を持っていることを知った。私たちの地形調査にも、土地の人々に関心を抱かせる面があったのである。しかし、この海岸につらなる狭い土地が人々の生活をいかに支えているのかを、私はさらに深く考えるまでには至らなかった。

田仲さんの本は、この海岸に住む人々の生活や人生の哀歎を、見事に描いている。調査の時に見た様々な風物が何であり何を語っていたのか、田仲さんの本を読んだ今になって、ようやく理解できたものが多い。ことに、私たちの調査対象の一つであった岩礁地帯が、海女を中心とする土地の人々の生活にどれほど深く関わっているかを、まざまざと教えられた。もっと早くこの本に接していれば、ここを訪れる楽しみは一層増していたことであろう。田仲さんの本はそのような思いを強くさせるものであった。

40年あまり、地形調査のために、あちこちをがむしゃらに歩いてきたが、土地の人々の暮らしにもう少し目を注いでくればよかったと、近頃になって思うことがある。私にとって田仲さんの本は、このような思いを新たにさせるとともに、長年調査してきた土地に住む人々の生活に初めて触れさせてくれた、『一冊の本』である。民俗を記した本にはもっとすぐれたものもあろう。しかし、その土地に生きる平凡な主婦が日常の暮らしをありのままに記したこの本には、稚拙な点もあるが、生きた人間の生活が描かれている。私はそのような本に強く引きつけられるのである。（東京農業大学）